

■ 神の時と聞く耳

私たちは聞く耳をもつことができているのでしょうか。多くの人は自分が立てた計画を成し遂げたいと思うものです。しかし、神様にそれを止められ、計画していないことが示された時、私たちはそれに聞き従うことができるでしょうか。パウロに起きた出来事もまさにこのような出来事でした。彼にも計画があり、向かう場所は決まっていた。しかし聖霊によってそれを禁じられ、次にはイエスの御霊が彼の計画を許しませんでした。そして、パウロは夢の中で神様に示された場所に向かって行きました。このようにパウロはいつも神様の声を聞き、従っていたのです。7 節に「イエスの御霊」と出てきますが、聖書のなかでこの言葉が使われている箇所はここだけです。使徒行伝を書いたルカが、この言葉を選んだ理由。それはパウロがどんな状況にあってもイエスに徹底的に従ったということを表現したかったのではないのでしょうか。元々はクリスチャンを虐殺し、迫害していたパウロでしたが、イエスキリストに出会ってから、彼は生き方を変えられていきます。改心したパウロですが、これまで迫害していた人物ですから、当然弟子たちのなかにも葛藤があり、ぶつかることもありました。15 章の後半にもそのようなことが書かれています。結果、第二次宣教旅行は二手に分かれて行動することになりました。パウロがルステラに行ったとき、テモテを宣教旅行に連れて行こうとしましたが、その時にも問題が起きました。父がギリシャ人だったテモテは割礼を受けていませんでした。しかし、ユダヤ人にとっては割礼を受けることが当然です。習慣の違う者たちの間で、パウロは板ばさみになったのです。15 章では割礼を受けさせなくてよいと語ったパウロですが、ここではテモテに割礼を受けさせます。なぜでしょうか。それは、ユダヤ人に宣教し、その地域の人たちを救うために、それが必要だと判断したからです。私たちもいつも神様の声を聞き、神様の知恵を求め、その時々にも最善な判断を愛に基づいてしなければなりません。

■ 主の働きには備えがある

彼らは神様に示された当てもない地へ海を渡って向かいました。計画もなく向かった場所ですから、泊まることも用意していませんでした。しかし、その場所でルデヤという女性に出会いました。そして彼女も、その家族も救われ、パウロ達に泊まる家を用意してくれました。そこを拠点にしてパウロ達は宣教をすることができたのです。その後、パウロたちのあとを、古い霊につかれた若い女奴隷が追いかけてきました。そして「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えている人たちです」と叫び続けました。一見正しいことを言っているように感じますが、パウロは初めから彼女が正しくないことが分かっていた。しかし、すぐに対処はせず、幾日か経ってから、悪霊を追い出しました。なぜすぐに対処しなかったのでしょうか。自分たちを宣伝してくれる彼女を利用してしまおうとしたのでしょうか。そうではありません。彼らは彼女の霊を追い出す前に、この地域の人たちを救いに導く必要がありました。「幾日も」と書かれています。おそらくその間に彼らはたくさんの人々を救いに導いたのではないのでしょうか。そしてその後、パウロは彼女の霊を追い出しました。パウロが神の声に聞き従い、神様の時を待って行動したとき、神様は救われる人々や、必要な出会い、場所、すべてを用意してくださったのです。

■ 人を見ると判断を誤る。だから人の心の内を見極める

次に出てくるのが、その女奴隷を雇っていた主人たちです。彼らはその女奴隷を利用して、多くの利益を得ていました。しかし悪霊が追い出されたことによって金儲けが出来なくなった彼らは、その憂さを晴らすため、あたかも正しいような訴えを起し、パウロ達を長官の前に引き出しました。そしてこの長官はパウロ達のことをよく調べず、裁判をすることなく、鞭を打ち、牢に閉じ込めました。この長官は人を見てしまったために判断を誤ったのです。私たちは人の心の内を見極める必要があります。自分の心の欲を果たすため、また心の憂さを晴らすため、あたかも正論のようなことを言うところから私たちに於けるのではないのでしょうか。そして私たちがもし、家庭、職場、地域、そのような場所でリーダーの役割を与えられているのなら、訴えてくる人たちの心をしっかり見極めて、心の内を見なければなりません。

■ 神の時を選んだパウロ

パウロはそもそも鞭を打たれ投獄される立場ではありませんでした。当時、ローマの法律では、ローマ市民を鞭で打つこと、まして

や裁判もせずに処罰されることは禁止されていました。しかし、ここでパウロは自分がローマ市民であることを明かしませんでした。なぜでしょうか。それは看守を救う必要があったからです。彼は投獄されてしまいます。しかし、真夜中に賛美を歌っている大地震が起こり、鎖が解け、扉が全部あいてしまいました。そこで、すぐ逃げることもできましたが、パウロはその場に留まりました。囚人を逃がしてしまったと思った看守は、処刑を恐れ自らで命を絶とうとします。そこでパウロは大声でそれを止めに入りました。看守は彼らにひれ伏し、救われるためには何をしなければならぬかと聞きます。そこでパウロは「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」と言ったのでした。私たちに希望をあたえるこの御言葉が生まれた背景にはこのような出来事があったのです。神に聞き、焦らず、無駄な言葉を話さず、必要な言葉だけを語り、神の時が来た時に行動したのでした。

■ 必要な時に必要なことを行う

その後、パウロ達がローマ市民であったことを知った長官は、ようやく事の重大さに気づき、警吏たちを送り、パウロ達をひそかに送り出そうとします。そこではじめてパウロは毅然とした態度で自分の意見を主張しました。結果、長官が直々に出向き、パウロ達に謝罪をすることになりました。今後、この場所で宣教する弟子達にとって、大きな影響を与える出来事になったのではないのでしょうか。この長官がリーダーをしている間、パウロの仲間である弟子達はきっと丁重に扱われ、神を信じ救われた人達もきっと守られたのではないのでしょうか。パウロはいつも神の時を待ち、必要な時に必要なことを行ったのです。

■ 真理はひとつ

パウロはこの 16 章で起きた様々な問題に対し、すぐに行動することは可能でした。しかし、だからと言ってその場ですぐに対処するようなことはしませんでした。神様の時を待ったのです。それは決してその問題を放っておいたり、利用したりしようとしたのではありません。悪霊につかれた女がパウロ達について来たとき、福音を広めるために、その女を利用することもできました。しかし、パウロはそれをしませんでした。悪霊は巧妙です。この出来事の裏には、悪霊たちがパウロ達の働きを利用して、融合させようとしたという背景があるのです。私たちも神様の働きを、この世の方法と上手く融合させて行おうとしてしまうことがあります。しかし真理は一つであり、複数あるわけではありません。パウロは神の働きを曲げることなく、神の時を待ち、そして愛の方法を貫いたのでした。悪霊につかれた女がその後どうなったかは聖書には出てきません。しかしこれまで悪霊から解放された人達は、大抵イエスについて行きます。だから、きっと彼女も救われたのでしょう。パウロは彼女が救われる時も待っていたのです。

■ 廃墟の幕屋の回復

パウロが神の働きを貫いたとき、迫害に会いました。不当な訴えにも関わらず、鞭打たれ牢に入れられたのです。しかしそのなかで、パウロは神様に祈り、賛美を歌っていました。私たちも、上手くいかないこと、願っていたことが閉ざされたことがあるでしょうか。真理を貫いたとき、迫害にあうようなことがあったでしょうか。そんな時、つぶやいていないでしょうか。私たちの心の中が廃墟になっていないでしょうか。私たちの顔はどうですか。周りにどの様に見られているのでしょうか。牢だと思われるような環境の中で、私たちは幕屋を回復し、周りとは違う者とならなければいけません。

■ 礼拝は人生を変える

私たちが神を礼拝するとき、それは私たちの顔や態度にあらわれます。私たちは神様を映す鏡のような存在です。パウロは計画していた場所がありました。しかし神の声に聞き従い、当てもない場所に進みました。そして、パウロの前に様々な妨害や迫害がおこりました。しかし神の時を待ち、必要な時に必要なことをおこなないました。パウロはいつも神様を礼拝し、すべての面でバランスを持っていたのです。上手くいかない時、願ったことが閉ざされた時、パウロが牢で賛美したように、私たちはどんな状況にあっても神を礼拝していかなくてはなりません。礼拝は私たちの人生を変えます。そして、その礼拝する姿を見たとき、周りの人の人生も変えられていくのです。神様との 1 対 1 の時を持ち、礼拝を回復していきましょう。

(要約者:永井匡史)

(2020年8月23日)